

## 【書評】

神奈川大学人文学研究所（編）

『ジェンダー・ポリティクスのゆくえ』（勁草書房 2001）

小玉亮子（横浜市立大学商学部助教授）

すこし前までは、ジェンダーといえば、フェミニズムに関心のある人や一部の専門家が使う言葉で、時には「それ、なんのこと？」といった反応をうけることもめずらしくはなかった。しかし、最近では、ジェンダーもすっかり市民権を得てきたような観がある。とはいえ、まだまだ歴史の短いジェンダーという言葉は、必ずしも共通の理解で使われているわけでもない。ジェンダーの解説として、もっともよく使われてきたのが「社会的文化的性差」という説明である。手っ取り早く説明するためにこの定義が多くの人に語られてきたが、今ではそういった説明のしかたに多くの問題がはらまれていることが指摘されるようになってきている。そのような中で、本書は、ジェンダーについて次のように踏み込んだ説明をする。

「階層的な性別二元制である現行のジェンダー秩序がセクシュアリティのあり方をはじめとして、あらゆる社会関係や制度を性別化して編成している」。すなわち、本書における現状認識は、性別というものは横並びに存在していないこと、しかもそれがあらゆる社会関係を組み立てている、というものである。さらに、本書の主題である「ジェンダー・ポリティクス」についての説明では、「そのジェンダー化が性別間の権力関係の非対称として現象している」との意味を込めたという（「はしがき」p. i）。つまり、ここで議論されるのは、単に男と女の両方を視野に入れた議論ではないし、男と女の社会的な違いの解説でもない。端的に言えば、権力関係の問題である。すなわち、性別という意味づけによって作用する権力関係を明らかにしていく試みであるといっていいただろう。

### 1. 読み直すこと、書き換えること

ジェンダーが権力関係として現象するという認識にたてば、ジェンダーの視点による分析が、権力構造の下位に位置づくものに焦点をあてるという方向もありうるだろう。例えば、無視ないしは軽視されてきた「女」ないしは「女の活動」に焦点をあてるというような。しかし、本書で試みられるのは、単に影の部分に光をあてる、という試みではない。むしろ非対称的な権力関係を作り出した認識枠組みとそのポリティクスの解明である。

例えば、山口論文において試みられているのは、広く読者を獲得してきたオルコットの『若草物語』の分析である。そこで、『若草物語』が、同じ著者が仮名で発表したスリラー小説と対置させられるとき、感傷小説ともいわれてきた『若草物語』がまったく違った様相を示し始める。この過程で、オルコットの作品を感傷小説とみなすような批評それ自体が、ジェンダー・ポリティクスの所産であることが明らかにされていく。

また、河上論文においては、女性教員の管理職比率の低さに対する従来の認識に対して、それは管理職モデルそれ自体が、男性モデルであったことを明らかにし、その従来の管理職モデルの方の変更を求める議論が展開される。笠間論文でも、これまでのセクシュアリティ認識がジェンダー秩序によって編成されてきたことが議論の俎上に載せられている。

本書において、明らかにされるのは、性別という意味づけによって構成された権力構造であり、そしてそのことを通じて、従来の認識枠組みの書き換えが試みられているのである。

## 2. グローバルな視点

このような著者たちに共有されている、従来のメインストリームにおける認識それ自体を読み直す試みは、グローバルな視点と接合される。

例えば、後藤論文は、ラテンアメリカにおいて試みられた女性たちによる草の根の運動に注目しつつ、その可能性と限界を論じる中で、ネオリベラルという時代の陥穽を明らかにするものであるし、沢田論文は、「華南経済圏」という地域の女性労働に注目することで、経済のグローバル化の問題点を指摘するものである。

こういった試みは、いわゆる南から北を批判する、という議論にとどまらない可能性を持つものである。入江論文において検討されるのは、南／北関係からの解放をめざす教育学それ自体が持つ問題性である。いわゆる「解放の教育学」がフェミニズム教育学における基礎理論であることを踏まえつつも、ジェンダーの視点にたつ教育の試みが、「解放の教育学」において問われなかった教育関係に潜む権力関係の問題と、抑圧されたものの内部にある差異の問題に取り組むものであること、そして、その中で、解放の教育学が主張した自らの普遍性（＝メインストリームであるという宣言）が、問い直されてきたことが明らかにされる。

このようなジェンダーの視点による従来の認識の読み直し、書き換えの試みは、本書の6人の著者たちの専門領域が異なるように、いまやあらゆる領域において求められている。その意味で、ジェンダー研究はひとつの領域ではなく、学際的研究であることを要求する。しかし、他方で、ジェンダー研究が進められ、専門家の層が厚くなっていくことが、逆説的にジェンダー研究という一つの領域化を形成してしまうことは、これまでたびたび指摘されてきた。

確かに、ジェンダー研究を進めていく上で、その担い手たちのコンシャスネス・レイジングは、まだまだ続けられる必要があるだろう。しかし、ジェンダー研究が、メインストリームの読み直し、書き換えを試みる時、それを語りたい相手は、なによりそのメインストリームである。メインストリームにいる文学者や経済学者といった研究者たちに、本書を手にとりて欲しいと思う。メインストリームに対してどのようにして語りかけるのか、ジェンダー研究のさらなる課題はそこにあるように思う。